

親

鸞



# 吉川英治全集

## 第20卷

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

---

講談社版

吉川英治全集・20 親鸞

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九  
電話東京九四二局一三〇  
振替東京三九三〇  
(大代表)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社  
本文用紙 日本パルプ工業株式会社特漉

第一刷発行 昭和四十一年十一月二十日

定価 六百八十円

© 一九六六年 吉川英治

## 序

歎異鈔旅にもち来て虫の声——

わたくしの旧い拙い句である。こんな月並に耽っていた青年頃から、自分の思索にはおぼろげながら親鸞がすでにあった。親鸞の教義を味解してというよりも——親鸞自身が告白している死ぬまで愚痴鈍根のたちきれない人間として彼が——直に好きだったのである。

とかくわたくし達には正直に人へも対世間的にも見せきれない自己の愚悪や凡痴を親鸞はいつも自然に「それはお互いさまですよ、この親鸞だって」と何のかぎりもなく易々と云ってくれているので、あのひとですらそうだったかとおもい、以後どれほど、自分という厄介者に、また人生という複雑なものにも、気がらくになったことかしない。

もっともその頃一時文壇にも親鸞が思潮の大きな対象となり、若い文学心と若き親鸞の求道心とが、幾世紀も措いた後世で生々とふれあい、現実の社会を鐘とし親鸞を撞木として、どんなひびきのことだ。あきらかに私なども、その文芸梵鐘にひきつけられていたものに違いなく、有名な遺文の中の一——「善人なおもて往生をとぐ、いかにいわんや悪人をや。」とか「親鸞は父母の孝養のためと

て、念仏一返にてももうしたることいまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情はみなもて世々生生の父母兄弟なり。」とか、また「親鸞は弟子ひとりもたずそうろう。」などという語は、わたくし達には、七世紀も前の古人の言というような気はしない。むしろ最も官能の正しくひろく澄みきった近代人の声として常に新しい反省と若い思索をよび起されるのである。

そして親鸞の生涯したその頃の時代苦をおもひ、今もかわらない人間の相をかえりみると、自ら下根の凡夫といひ愚禿と称した彼の安心の住みかは、求めればいまでもたれの目の前にもあるのだという事実を觀ずにいられないのだった。けれどわたくしの場合はそれも信仰のかたちでなく憧憬の中にもいつも育っていた。親鸞といえはすぐ青年時代の文芸覚鐘が同時にひびいてくるせいかもしれない。事実また親鸞ほど詩人的な肌あいをもった宗教人も世界に稀れであらう。

わたくしの作家生活と親鸞とは忘れ得ないものがある。いまおもえば恥かしい限りだが、私が初めて小説というものを書いた最初の一作が親鸞だったのである。当時わたくしは『新聞社の駆け出しの学芸部記者だった。三上於菟吉氏去り尾崎士郎氏退社し、そのあとへ入ったばかりで編輯の仕事すらろくにのみこめていなかった。その私へどうしたことか連載小説として親鸞伝を書けという社命なのである。いつけた社も社であるがひきうけた私も私だ。知らないということほど気のつよいものはない。私は毎朝、他の同僚たちより二時間も早く出勤し、社用のザラ紙へ鉛筆書きで毎日の掲載分をその日その日書いた。下版の時間が迫ると、工場の植字さんがやって来て私の肩越しに原稿をのぞきこみ「そこそこは会話にしておきなさいよ」とか、ひどく時間がつまると「もう今日はこれでい

い」と、まだ書いてるものを後ろから持って行ってしまったらしい。

連載中もよく本願寺関係のひとや篤学家などに社へやって来られて、堂々たる親鸞論を以て駁されるには閉口した。事信仰ことに関わるので読者の投書も痛烈だった。社内でも時代考証や文学論にやましいのがいてゲラ刷の出るたび手きびしくヤツつけられた。何分、社では参考書も見ていられないので、途中からは帰宅後、家で夜半なかに書いて行ったが、それでも思わぬ誤謬や不備を指摘されてきゅうきゅういわせられたことが幾度あったことかしかない。遂には社に行くこと屠所ととの羊のごときものがあった。でも漸く何とか一年半余の連載を果たした。それが「親鸞記」として社から出版の運びになったところで関東大震災が来た。かくて私の処女作は世間へ出ずに製本されたまま社屋とともに焼けてしまった。わたくしの出発にとっては意義のあるまた有難い業火であった。

中年になってふたたび親鸞を書いた。台日、福岡、名古屋、北海タイムス等、地方紙五社の連載のために書きおろしたのであり、昭和十三年に刊行された講談社版の「親鸞」がそれである。新聞紙上の連載は三年近くにも及んだかとおもう。

十余年まえにいちど書いた基礎はあるが、わたくしはいろはの習い直しをやる気でそれをつづけた。こんどは作家生活の中でやれたので参考書も自由にえらび見ることができた。そしてこんどはつがなく出版もされた。——だが自分の胸には依然新聞社時代の痛い批判が消されることなくそのまま自省のうちに残っていた。以後、わたくしの通ってきた人生も決して平坦ではなかったが、かえりみて自分がどれほど人間として成人したかをこの作品でみるとわれながら恥かしいと思わぬわけに

ゆかなかった。で、講談社刊行の一卷の序文にはこんな意味のことをしるした。

三十歳<sup>だ</sup>台に書いた親鸞は、めくら蛇<sup>へび</sup>に怖<sup>お</sup>じずだったが、四十台になると生<sup>なま</sup>なか人生や人間を觀<sup>み</sup>るにも、うす目のあいてきたせい<sup>か</sup>、深嶽<sup>しんがく</sup>に足をふみ入れたようなもので、却って迷<sup>まよ</sup>いにとらわれがちだった。正直に言えば親鸞をかくにはまだ自分が力不足だし何よりも人間がそこに至っていない。五十台になったらもう一ぺん書きあらためたい。

いま此書が講談社から再刊となるにあたって、私は初版の序文に約した自己の良心にたいして、どうしても黙<sup>もく</sup>しているわけにゆかない。私の年齢はすでにさきの公約の時期に来ているからである。

ところが私はまだ三度めの親鸞をかいていない。いつかはと意欲は決して失っていないが、機<sup>あ</sup>に会わずにいるのである。また自分の成長も依然たる未熟にとどまっていることを知<sup>し</sup>るからでもある。

——が、出版社側<sup>がわ</sup>のすすめとしては、それは将来の課題としておいて、現在の読書子に此書を再刊する意義は充分にある。——おたがい<sup>が</sup>がすでに麻痺を怖<sup>おそ</sup>れあうほどにまで眼に見、肉体に知り、耳にききあっている敗戦後のひどい世相の転変<sup>てんぺん</sup>と荒<sup>あ</sup>んだ虚無感にたいし、またその中にもなお何か求めてやまぬ人<sup>ひと</sup>たちへたいしても——と熱意を更えない希望なのである。著者としてはさきの序文の公約もあるし、さまでには——と青年時代の山を見ぬ獵夫の意気にもなれない躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>をなお持つのだが、終戦以後、出づべくして出でない宗教小説乃至宗教面の書のこれが一投石ともなれば再刊もまた多少の意義にはならうかなどとも思い直してみた。その結果、多少の加筆校訂をする程度でついに出すことにしたわけである。諸子の御諒恕を仰いでおく。

内容についても、一言附<sup>+</sup>しておきたい。

親鸞の出現は、その時代にあつては、実に宗教の世界ばかりでなく、思想の上にも、庶民生活にも劃期的な変革をよび起した先驅者の炬火そのものだった。

久しいあいだの貴族宗教の弊や門閥教団の害を彼は打ちやぶった。法悦の樂土を殿堂の神秘から庶民社会へひき下ろした。また秘仏の壯嚴<sup>そごう</sup>よりも赤裸な人間のなかに菩提<sup>いんし</sup>の因子を求めて、これに偽<sup>いつわ</sup>りのない平明な解義を附<sup>+</sup>したのも彼だった。いわば平民主義新宗教の宣布者であり、日本では前後に見ない民主的な教義をひっさげて出た革新児であつた。

だが、その親鸞においてすら、伝記の史料となると、偶像の瑤瑤<sup>ようろう</sup>や粉飾<sup>ふんしよく</sup>とひとしく、余りに常套的な奇蹟や伝説が織りまぜられていて、これの科学的な分解と小説的調整は決して容易なことではない。

月の世界に兎がいるとしていた時代には、事実、月の世界に兎が見えていたのであるから、それらの奇蹟伝説も、曾<sup>か</sup>つては一価値のものであつたにはちがいないが、現代人にはそのままうけ入れられるはずもない。当然、わたくしの小説構成の上ではそうした既成構造がかなり変更され、また敢て無視した箇所もあり、創意も加えられてあることを憚<sup>は</sup>りなく云っておく。そしてただ著者の惧<sup>おそ</sup>れるのは、旧著の不備と、非才にして懶惰、まだ十年の約を果していない罪とである。ふかくお詫びするのほかはない。

昭和二三・初冬 吉野村菴にて

著 者

目次

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 序 | 乱 | 紅 | 登 | 去 | 女 | 大 | 恋 | 同 |
|   | 国 | 玉 | 岳 | 来 | 人 | 盗 | 愛 | 車 |
|   | 篇 | 篇 | 篇 | 篇 | 篇 | 篇 | 篇 | 篇 |

|   |   |   |    |    |    |    |    |
|---|---|---|----|----|----|----|----|
| 三 | 七 | 共 | 一七 | 一三 | 二五 | 三〇 | 二六 |
|---|---|---|----|----|----|----|----|

法 悪 氷 田  
敵 人 雪 歌  
篇 篇 篇 篇

二五 三八 三七 四三

さしえ  
杉  
本  
健  
吉

親

鸞



## 乱国篇

### 第一の聲

一

朱雀の辻に、鈴を鳴らして、今朝から、喚いている男があった。

蜂にでもさされたのか、陽にやけた顔が、腐った柘榴みたいに凸凹にゆがんでいる。大きな鼻と、強情らしい唇を持ち、栗のイガみみたいに、蓬々と伸びた坊主頭には、白い埃がたかっていた。

年ごろは、そんな風なので、見当がつかない。三十とも見えるし、四十かとも思われる。身は、やぶれ衣に、繩の帯一つ。そして、沓よりは丈夫らしい素裸足で、ぬっと、大地から生えているというかたちである。

りいん！ りいん！ 振り鳴らす鈴の音も、凡な力ではないのだった。群衆は、取りまいて、

『何じゃ』

『どこの山法師かよ』と囁き合った。

残暑の往来を、牛車が、埃をたてて軋る。貴人の輿がとおって行く。

また、清盛入道の飛耳張目——六波羅童と呼んで市人に恐れられてゐる赤い直垂を着た十四、五歳の少年等が、なにか、平相国の悪口でも演じてゐるのではないかと、こまじやくれた眼を、きよろきよろさせ、手に鞭を持って、群の蔭からのぞいている。

だが、男は、憚らない大声で、自分のシャがれ声に熱し切ると、我れを忘れたように、右手の鈴を、宙にあげて、

『清聴つ、清聴つ——』と呶鳴った。

『——沙弥文覚、敬つて、路傍の大衆に申す。それ、今世の相を見るに、雲上の月は、絶えまなく政權の争奪と、逸楽の妖雲に戯むれ下天の草々は、野望の武士の弓矢をつつむ。法城は呪詛の炎に焼かれざるはなく、百姓、商人、工匠たちの凡下は、住むべき家にも惑い、飢寒に泣く。——まず、そうした世の中じゃ。——そうした世に生きる人間どもは、必然、功利に溺れ、猜疑深く、骨肉相食み、自己を省みず、利を獲れば身をほろぼし、貧に落つれば、人のみを呪う。富者も餓鬼！ 貧者も餓鬼！ そして、滔々と、この人の世を濁流にする——』額に汗をして、そこまで、一息に云った。

そして、りいん！ とさらに、鈴を振りかけると、

『乞食法師、待てつ』誰か、呶鳴った。

赤い直垂が、人垣を掻きわけて、前へ出て来た。

（六波羅小僧）人々は、眼と眼で、ささやき合った。不安な顔をして、法師の鈴と、少年の鞭とを、見較べた。法師は、傲然と、

『何か』と、云った。

平家の庁の威光をかさに着て、いかにも、小生意氣らしい町隠密の少年は、鞭で、大地をたたきながら、

『おのれは今、——富者も餓鬼、——貧者も餓鬼、——そして、雲上は政權の争奪と、逸樂の妖雲に蔽われている』

『はは……人の話は、仕舞いまで聞け、それは、昨日の源氏の世を云うのだ。……これから、今日のことを云う。だまつて、そこにおいて、聞いて居れ！』

鈴を、ふところに入れて、その懷中から、文覚は、何やら、紙屋紙に書いた一通の反古を取り出した。

二

『これは、勸進の状』文覚は、群衆へ云つて、それから、おもむろに書付をひろげだした。

眼の隅から、剣き飛ばされたように、六波羅童は、手もちぶさに、人混みの中へ、引っ込んでしまふ。

(さまを見ろ)と云うように、人々は、赤い直垂の尻を、眼で嗤った。

文覚は、勸進の文をひろげ、胸をのぼして、さてまた、大声を揚げ直した。

『——今、云ったは、昨日のこと。さても明日の世はまた、冥冥としてわからない。今日が、平和と云うたとして、生死流転、三界苦海、色に、酒に、金に、跳猿の迷いから醒めぬものは、やがて、思い知る時があらうというもの。白拍子の、祇王ですらも歌うたではないか——』

萌え出るも

枯るも同じ

野辺の草

いずれか

秋にあわで果つべき

心し給え、大衆。いずれか秋にあわで果つべきじゃ。ここに、不肖文覚、いささか思いをいたし、かくは路傍に立つて、われ等の同血に告ぐる所以。ねがわくは、貴賤道俗の助成によつて、高雄山の靈地に、一院を建立し二世安樂の勤行を成就させ給え』と、眸をあげた。

燃えるような眸である。人間同志の今の不安を見過し得ない憂世の血が、その底を流れている。咳一咳して、『依而、勸進の状』と、手にひろげていた文を高々と読みはじめた。

それ惟みれば

真如広大なり

法性随妄の雲

あつく覆つて

十二因縁の峯に躑きしより

この以降

本有心蓮の月のひかり

幽かにして

まだ、三毒四慢の太虚に

あらわれず

悲しいかな

仏日はやく没して

生死流転の巷冥々たり

ただ色に耽り、酒にふける

いたずらに人を謗し

また世を毒す

豈、閻羅獄卒の責を免れんや

ここに稀い、文覚俗に払い法衣を飾ると雖も悪行なお心に憂り

善苗、耳に逆ういたましいかな

再び三途の火坑に回り

四生の苦輪を廻らんことを故に、我

無常の觀門に涙し

上下の真俗をすすめて

菩提の悲願に結縁の為

一の靈場を建てんとなり、

それ、高雄は山高うして

鷲峯山の梢に表し……

声かぎり読んでゆくうち、汗はだくどくと彼の赤黒い顔に筋を描いているのだった。群衆は一人去り、二人去って、誰も、懸命な彼の声に、衝たれている者はなかった。

(なんじゃ、また勸進か) 大衆は、錢乞いに、懲りている。惜気なく、彼を残して、散ってしまう。ただ一人、立ち残って、

『おい、盛遠殿』と呼びかけた旅商人がある。

三

『盛遠殿』旅商人はまた、辻の柳樹の蔭から声をかけて、

『もう誰も、お身の周りに聞いている者はないぞ。——盛遠殿』

文覚は、はっと、勸進の文から顔を離して、いつのまにか、犬も居ない辺りの空地に、舌うちをした。そして、腹たたしげに、

『やんぬるかな!』つぶやいて、勸進の文をぐるぐると巻き、

ふところに突っ込んで、歩みかけた。

すると、日除笠で顔を縛った旅人は、ついと、彼のそばへ寄って来て、文覚の肩をたたいた。文覚は、じろりと眼を向けて、

『おう。堀井弥太か』初めて、驚いたらしい顔をして手をのばした。

弥太と呼ばれた旅の男は、なつかしげに、握り合った手を、なぜか急に離して、

(叱つ……)と、眼じらせをしながら、路傍へわかれた。

さっきの赤直垂の小僧が、ちんと、手漬をかみながら、二人のあいだを、威張って通って行った、そして、小馬鹿にしたような眼を振向けて、へへ笑いを投げた。

旅商人は、その眼へ、わざと見せるように、ふところ紙を出して、錢をつんでいた。そして、文覚の手へ、

『御寄進——』と云って、渡した。

『や』文覚は、真面目に受け取って、押しただいた。

『一紙半錢の御奉加も、今の文覚には、かたじけない。路傍にさけんでも、人は、耳をかさず、院の御所へ、合力をとて願いに参れば、犬でも、来たかのように、掴み出される……』

旅商人の堀井弥太は、先へ、足を早めながら、

『頑へ』と、顎をしゃくって、見せた。

頷きながら、文覚は、てくてくと後から尾いてゆく。牛の糞と、白い土が、ぼくぼくと乾いて、足の裏を焦くような、京の大路であった。

だが、加茂の堤に出ると、咸陽宮の唐画にでもありそうな柳樹の並木に、清冽な水がながめられて、冷りと、顔へ、濡れ紙のような風があたる。

『ここらでよからう』二人は堤に坐った。汗くさい文覚の破れ

衣に、女郎花の黄いろい穂がしなだれる。

『しばらくだなあ』弥太が云うと、

『無事か』と、文覚も云う。

『いや、俗身は其許のように、なかなか無事ではない』

『俺とても、同じことだ』からからと、文覚は、笑って、

『聞かぬか、近頃の噂を』

『今日、京都へついたばかり。何のうわさも聞いておらぬ』

『そうか。……実は、神護建立の勧進のため、院の御所へ踏み

入って、折から、琵琶や朗詠に酒宴していた大臣どもに、下々の

困苦の呪い、迷路の呻きなど、世の実相を、一席講じて、こ

の呆痴輩と一喝した所、武者所の侍どもに、襟がみ取って抛り

出され、それ、その時の傷や瘤が、まだこの頭から消えておる

まいが……』イガ栗の頭を撫でて、笑いながら示すのだった。

顔の凸凹に腫れ上っているのも、その時の棒傷であつたらし

い。

#### 四

文覚は、まだ十九の頃に、若い髻を切つて、大峰、葛城、

粉川、戸隠、羽黒、そしてまた那智の千日籠りと、諸山の荒行

を踏んできた、その昔の遠藤武者盛遠が成れの果てであつた。

どこかに、面影がある。

いや、ありすぎる——と旅商人の堀井弥太は、そう思いなが

ら、彼の磊落な話しぶりに、誘ひこまれて、腹をかかえた。

『はははは。——道理で、疱瘡神のように、顔も頭も、腫れて

おる』

『まだ、いたい』

『懲りたがよい』

『何の、懲りる男じゃない』

『法衣はきても相かわらずの武者魂、それでこそ、生きてい

る人間らしい』

『生れ変つて来ぬうちは、その魂というやつ、氷の上に坐らせ

ても、滝に打たせても、容易くは、変らぬものじやて』

『わけて弓矢にきたえられた根性は。——したが一別以来、お

互いに、変らぬ身こそ、まずめでたい』

『いや、おぬしの身装は、ひどう変つておるぞよ。初めは、誰

かと見違えた』

『これは砂金売りの旅商人、よも、侍と見るものはあるまい』

『陸奥守藤原秀衡が身うち、堀井弥太ともある者が、いつの間

に、落魄れて、砂金商人にはなりつるか、やはりおぬしも、無

常の木々の葉——。梢から、何かの風に、誘われたな』

『何の』と、弥太は手を振った。

『これは、世をしのぶ、仮の姿じゃ』

『さては、京都へ、密使にでも来たという筋あいか』

『ま、そんなもの』

『俺の身上ばかり糺さいで、その後のおぬしの消息、さ、聞こ

う。——それとも、旧友文覚にも、洩らせぬほどの大事か』

『ちと、言い難い』

『では聞くまい』

『怒ったか』

『ム、怒つた』文覚は、わざと、むつとして見せたが、すぐ白

い歯を剃きだして、

『そう云わずと、話せ。法衣は着ても、性根は遠藤盛遠、決して、他言はせぬ』

『……』弥太は、立つて、堤の彼方此方を、見まわしてい

た。頭に物に乗せた大原女が通る。河原の瀬を、市女笠の女

が、女の使童に、何やら持たせて、濡れた草履で、舎人町の方

へ、上ってゆく。

ほかには、蟬の音と、水のせせらぎと、そして白い水鳥の影が、気だるく、淀に居眠っているだけである。

『盛遠』坐り直す、

『わしの名は、文覚。盛遠は、十年も前に捨てた名まえ、文覚と呼んでくれい』

『つい、口癖が出てならぬ。——ならば序に、俺の変名も、おぼえておいて、もらおうか』

『ほ。名を変えたか』

『旅商人が、堀井弥太では、おかしかろう。——一年に一度ずつ京都へ顧客廻りに来る、奥州者の砂金売り吉次とは、実は、この弥太の、ふたつ名前だ』

『え。吉次』

『そう聞いたら、何か、思い出しはせぬか』

『思い出した。……おぬし、鞍馬の遮那王様へ、密かに、近づいて居るな』

## 五

鞍馬の遮那王。ずばと、そう云ったのである。

この金的は、よも外れてはいまい——と云うように、自信をもった眸で、文覚は、じいっと、相手の顔いろを見る。

『……うむ。堀井弥太の砂金売り吉次は、笑顔をたたえて、額いた。ふとい——大きな息で、

『……そうか』文覚も、うなずき返した。

遮那王といえは、源家の嫡男、前左馬頭義朝の末子で、幼な名を、牛若といった御曹子のことだ。常磐とよぶ母の乳ぶさから挽き離されて、鞍馬寺へ追い上げられてから、もう、十年の余になる。

『……』文覚は、黙って、指を繰っていた。弥太の吉次も、黙然と、大文字山の雲を見ていた。

『今年は、承安三年だな』

『左様——』

『すると、遮那王様には、お幾歳になられるか』

『十五歳』吉次が、答えると、

『ほ……。はやいものじゃ。もう、あの乳くさい源家の和子がお十五にも相成ったか』

『文覚、おぬしも稀には、お会いなさるか』

『いや、一昨年、書写山に詣でた折、東光房の阿闍梨を訪ねて、その折、給仕に出た稚子が、後で、それと聞かされて、勿体ない茶を喫んだと、涙がこぼれた。——噂によれば、僧正ヶ谷や、貴船の里人共も、もてあましている暴れン坊とか』

『さればさ、寺でも、困っておるらしい』

『その困り者へ、眼をつけて、はるばる奥州路から年ごとの鞍馬詣では……』

『——奥州平泉の豪族が、奢り振舞う平氏の世を憎んで、やがて源家へ加担の下地でなくて何であらう。これは、世の中が、ちと面白くなりそうなの』それには答えないで、

『おや』吉次は、空を仰向いた。ボツ、と雨が顔にあたる。

加茂の水には、小さな波紋へ、波紋が、無数に重なった。東山連峰の肩が、墨の虹を吐き流すと、蒼空は、見るまに狭められて、平安の都の辻々や、橋や、柳樹や、石を載せた民家の屋根が、暮色のような薄暗い底に滅んでゆく。

『ひと雨来るな』文覚も、立ち上って、

『弥太。——いや奥州の吉次殿、して、宿は』

『いつも、あてなしじゃ。嚙を定めぬ方が、渡り鳥には、無事でもあるし……』